

# 白井市立大山口小学校

## ——外部との連携によるカリキュラム開発と授業研究——

センター客員講師・信州大学教育学部講師 村瀬 公胤

本稿では、千葉県白井市立大山口小学校の校内研の事例を報告する。この事例は、学校の教員が学校外の団体と年間を通して連携しながら総合学習のカリキュラム開発と授業研究を行ったという特徴を持っている。また、筆者もこれに教育学研究者として参加し、アドバイスや評価を担当することによって、ある種のアクションリサーチとなったことも特徴と言える。この1年間の活動を整理し、連携の中で生まれてきた成果を報告しながら、校内研のデザインについて示唆を得ることが本稿の課題である。

### 1. 活動の概要

大山口小学校において、理系大学院生が集まって設立した有限会社リバネス（のちに株式会社）と学校の教員集団が連携して5年生の「総合的な学習の時間」のカリキュラムを作り、授業を実施した。このカリキュラム（大単元）のテーマは「いのちってなんだろう」というもので、リバネスのメンバーの本職である自然科学バイオ分野の研究の最先端に子どもたちが触れながら、生命や環境について学び考えることを目的としている。カリキュラム開発と授業の実施およびその検討は、大山口小学校側としては校内研修の一部と位置づけられ、「バイオ授業」と呼ばれていた。これにならって、本稿以下では、この活動全体をバイオプロジェクトと呼ぶことにする。

#### 1.1. 学校と地域

大山口小学校は千葉県の印旛地区にある白井市の小学校である。校区は千葉ニュータウンの一部に含まれており、都心に30-60分の通勤圏である。昭和50年代以降の団地が主だが、周囲では各種の農業が営まれている。総じて教育への関心は高い地域で、PTAのほか「おやじの会」があるのも本校の特徴である。校長先生の談話によれば、「落ち着いた地域で、学校にも協力的です」とされている。開校は昭和54年で、現在の規模は児童数356名、教員数16名、学級数11となっている。

#### 1.2. 授業実施クラス

今回授業の実施対象になったのは、5年生にある2ク

ラスの両方（1組、2組）である。授業内容が高度であることと、理科などの他教科の内容との関連を考え、この学年での実施が決まった。それぞれの児童数は1組29名、2組29名（2学期途中に転入により1名増）である。

#### 1.3. バイオプロジェクトのメンバー

バイオプロジェクトはつぎの三者から成り立っている。

- 1) 大山口小学校教員：5年生の担任教員（2人）と他の学年の担任や専科の教員（4人）の計6人で「バイオ部会」を構成していた。
- 2) リバネス：大学院生などで、計4人が授業を担当した。このほかに、実験の授業の時には助手が数名教室に入る。
- 3) 東京大学（当時）：村瀬（筆者）が教育学研究者として参加した。

#### 1.4. 期間

本研究の期間は2003年2月～2004年2月であり、大きく3つの段階に分けられる。

##### 第一段階（2～7月）

2月に初めて関係者（白井市教育委員会事務局を含む）が顔合わせしたが、その後しばらく共同作業はなかった。この時期に主にリバネスがカリキュラムの大枠を作っている。また、この段階では対象クラスの保護者向けに説明会（学校とリバネスと村瀬が参加）も行っている。

##### 第二段階（7～8月）

大山口小学校側の体制も決まり、夏休みからカリキュラム構想が本格化する。三者が定期的に集まり、カリキュラム、教材などについて話し合った。ミーティングは全7回（ただし、うち1回は学校全体への報告会）で、1回あたり3～6時間くらいであった。

##### 第三段階（9～2月）

授業が始まり、次節で述べるような研修サイクルが行われた。この時期は単元の区切りでさらに3期に分かれる。また、各期の内容については、次項に示す。

- 1期（9～10月）：遺伝について
- 2期（11～12月）：遺伝子とその操作
- 3期（1～2月）：生命と環境

#### 1.5. カリキュラム

バイオプロジェクトのカリキュラムは、後述するように授業が行われるたびに改訂され続けることになったが、大単元を終えた段階からふりかえって学習内容を記録すると、以下のようなものとなる。

第1期：いのちを伝える「遺伝の書」			
第1次	9月25日	学級担任	いのちってなんだろう（生命の連続性）
第2次	9月30日	リバネス	ブロッコリーからDNA抽出実験
第3次	10月7日	部会メンバー	DNA模型作り（4つの塩基とDNAの複製）
第4次	10月15日	リバネス	RNAの暗号ゲーム（mRNAのはたらき）
第5次	10月23日	部会メンバー	転写ゲーム（遺伝子から形質発現へ）
第6次	10月30日	リバネス	村山ワールド（植物の成長と動き）

第2期：遺伝子がかわるといのちがかわる			
第1次	11月18日	部会メンバー	いのちはひとつだった（系統樹）
第2次	11月25日	リバネス	遺伝子が変わるとかたちが変わる（進化）
第3次	12月2日	リバネス	DNA組み換え実験1日目
第4次	12月3日	学級担任	DNA組み換え実験2日目
第5次	12月9日	部会メンバー	遺伝子組み換えをどう使うか
第6次	12月11日	リバネス	本間ワールド（KIF2）

第3期：環境といのち			
第1次	1月27日	学級担任	ホルモンとは何か
第2次	2月9日	リバネス	環境ホルモンについて知る
第3次	2月10日	リバネス	メダカで環境ホルモンを調べる
第4次	2月12日	学級担任	神崎川を調べに行こう
第5次	2月14日	学級担任	神崎川の水でメダカはどうなった？
第6次	2月19日	学級担任	地域の環境について聞く
第7次	2月25日	全員	大貫ワールド、清水ワールド、単元の総括

各次は2時間±1時間

## 2. 研修の様態

### 2.1. 学校全体から見て

大山口小学校では校内の研修が二つの部会に分かれている。一つは本稿の報告対象である「バイオ」部会で、もう一つは4年生を中心にピア・サポートの授業を研究する「ピア・サポート」部会である。教員はどちらかの部会に属するが、選択は各自の意思に任されている。結果的に、どちらの部会も10名以内の小さいグループとなっている。

### 2.2. 授業と研修のサイクル

9月下旬以降は前節に示した日程で授業が行われた。各授業日には、おおむね次のようなサイクルが実施された。

1) 授業：各クラス2時間の授業を行う。たいていの場

合、午前の1-2校時と3-4校時に5年1組と2組で交互に行われた。ただし、実験や校外活動によってはこの限りではない。

2) 検討会：授業日の放課後に検討会を設ける。だいたい15:30-18:00くらいの時間帯。ほとんどの場合、バイオ部会の6人全員とリバネスから1-4名と村瀬が参加している。本時の反省検討を行い、次時以降の授業案の確認および修正をする。

### 2.3. 研修の内容

研修の内容あるいは議論の焦点については、夏休み中の第二段階と授業が始まった第三段階では変化した部分もある一方で、継続して話し合われたテーマもあった。（第一段階では、実質的な研修は行われていない。）

第二段階では、大単元の目標や全体の構成などがまず主題となった。また、バイオの専門的な知識に関わる事柄も話し合われた。たとえば、「ホルモンとは何か」、「遺伝子とDNAはどう違うのか」などがあり、場合にに応じてリバネスのメンバーが講師役をして教員側にレクチャーするようなことも行われた。しだいに教材や発問といった具体的なものに話し合いは移行し、教員とリバネスとの準備の分担などが決められていった。また、それに呼応して、授業案のたいたいの部分も作られていった。

第三段階では、まず当日の授業の省察が中心となった。2クラスの子どもたちの様子や反応について話し合い、教材や発問、授業案について考えた。それをふまえて、次回の授業の組み立てや教材案を見直すことが行われた。また、授業の省察では、教材や授業案のレベルとは別に、授業者の子どもたちへの対応や声の出し方、授業のテンポなどのレベルの問題も活発に議論された。

このように段階に応じて議論の主題は変化しているが、大単元の目標に関する話題は、第二段階に引き続き第三段階でも繰り返し言及されていた。なぜならば、各期各次の授業案を作るときでも、迷ったり困ったりしたときには大単元の目標に立ち戻ることによって解決への指針を得ることが行われていたからである。

### 2.4. 研修の特色

このバイオプロジェクトの研修には、以下のような特色がある。

1) 少人数による自律的な研修：

「ピア・サポート」と「バイオ」の二つの部会から自主選択制で参加していること、部会メンバーが6人（リバネスや筆者を含めても最大11人）という規模であることなどから、メンバー各自の意欲が高く維持できていた。さらに、担任教諭以外でも部会メンバーの全員が1回は授業を行うように工夫したこともあって、メンバーの一

部が傍観者になることが抑えられような仕組みになっている。

加えて、規模の小ささは動きやすさというメリットも生んでいる。日程の調整などがしやすく、できる限り全員が参加できるような研修日程が組んでいた。また、日程の変更にも柔軟に対応できたと思われる。

#### 2) 公開研究授業を行わない：

今回のバイオプロジェクトでは、大掛かりな公開研究授業は設定されなかった。そのため、公開に関わる諸々の作業をすることなく、人的・時間的・経済的資源を授業研究そのものに振り向けることができた。(もちろんこのことは、将来にわたっての公開授業を否定するものではない。実践の蓄積ができたところで、公開を行ってこのプロジェクトの意義を問うことは、じゅうぶんに意味のあることだと予想される。)

#### 3) 全ての授業が公開されている：

一見、上と矛盾することだが、全ての授業があらゆる人に開かれていることもこのプロジェクトの特徴である。ある時間を公開として設定するのではなく、全時間を公開し、誰でも参観に来てよいことになっていたのである。

まず担任の二人はお互いのクラスの授業を見合うことによって、全ての授業を見ることになっていた(その時間の担任クラスは、専科などを組むようにする)。つぎに、部会メンバーはそれぞれやりくりをして、なるべく授業を見るように工夫していた。そのほか、部会メンバーでなくても校内の教員が見に来ることは自由にできていた。

さらに、校外の人も自由に参観することができた。保護者はもちろんのこと、地域の人、市内の学校の教員なども参観に来ていた。

#### 4) 外部との継続的連携：

リバネスのメンバーは、いわゆるゲストティーチャーとして授業時のみ学校に来るのではなかった。講師として授業の一部を担当することに加えて、カリキュラム全体の構成から個々の授業案づくりに至るまで、全ての場面に参加し、学校のバイオ部会と協同で作業していた。

第二段階では、まず授業案づくりに関して自然科学の専門的な知識の面で教員側に協力していた。加えて、子どもたちに何を伝えるのかについて粘り強く話し合い、教員側とリバネス側で授業や単元の目標を共有することに努めていた。

つづいて第三段階では、リバネスのメンバーは研修サイクルの全てに参加した。リバネスのメンバーが授業したときはもちろん、そうでないときにもメンバーの誰か

が授業を参観し、放課後の検討会にも出席していた。ここでは、授業中の子どもたちの学習の進展について教員・リバネスの両サイドからの検討が加えられ、次時の授業案の修正が行われた。また、教員あるいはリバネスのどちらのメンバーが授業を担当したときでも、検討会では授業中の発問や子どもへの対応について参加者から率直にコメントが述べられることによって、リバネスのメンバーも教員も授業者として学ぶ場となっていた。

### 3. 研修の効果

#### 3.1. アンケート

本プロジェクトでは、バイオ部会の教員に研修に関する感想のアンケートを第二期終了後(12月下旬)に行った。アンケートの設問は計7問だが、前半3問がこの研修に関するもの、後半4問が研修一般に関わるものとなっている。全回答については最後に「資料」として添付したが、ここでは前半3問について、回答の概要を以下に記す。

[1. 1 この研修の楽しさやおもしろさについてお聞かせください。]

「研究者の考え方や物の見方に直接ふれながら新しい知識を得ることができたこと」のように未知の分野に触れることのおもしろさと、「そうした世界に触れた子ども達の輝いた表情を見ることができた」という授業のよろこびが主に語られている。

[1. 2 この研修の難しいところ、苦労されているところについてお聞かせください。]

「ある程度内容を理解できていないと活動案がたてられないところ」のように内容に関する難しさと「研修時間の確保」という制度的な難しさが語られている。

[1. 3 この研修を通して、教師として自分が変わったな、成長したなと思うことはありますか。]

ここでの回答は大きく三つに分けられる。第一に、「バイオに対しての関心が高まった」ことや「命あるもの、または地球という星に対する感性が変わったような気がします。」というように、教師自身がバイオ分野を学んだり考えたりすることがある。第二に、「従来とは違うスタイルの授業のあり方について考えることができ」たことや、「子どもの興味、関心をもたせ方及びもたせることの大切さを改めて感じた」こと、「いろいろな方の授業が参観でき指導法について学べたとともに今まで以上に学級が授業がオープンになった」というように、お互いの授業から学ぶ意義についての回答がある。第三に、「子どもたちの力を新たに発見した」という子どもの再発見についての感想がある。

### 3.2. プロジェクトがもたらしたもの

以上のアンケート結果や第2節に述べたバイオプロジェクトの特色をふまえて、この研修が教員にもたらしたものを整理すると、以下の3点にまとめられる。

#### 1) 専門性：

外部との連携で授業案を作りかつ授業実施後の検討を重ねるなかで、教員ができること、やるべきことが鮮明になった。一連の研修において、子どもたちの現在の状況を的確に把握し、それを次時にどうつなげるのか、どのような学習の展開に導いていくのかと構想することは第一に教員の責務であった。これには、個々の教員の経験と見識に基づく、高い専門性が要求された。従来の授業では自明のあまりそうとは自覚されないかもしれないこの責務が、外部との協同による検討会などを通じて言語化され、協同の中で各教員がこれを問い直すことができた意義は大きいだろう。

#### 2) 同僚性：

このプロジェクトでは、部会メンバーが協力してひとつのカリキュラムを構築し、交替で授業を実施し、相互に授業を見合うことが試みられた。それによって、教員はふだん見ることのない同僚の授業を見ながら、授業の方法論についてお互いに学ぶことができた。また、授業後の検討会ではともに見た同じ授業について検討するなかで、自分とは異なる視点を発見することもできた。そうした互恵的学習を媒介として成立する同僚性は、専門職としてお互いに尊重しあう学校風土を形成し、成長する教師を支えることになるだろう。

#### 3) 開放性：

全ての授業を公開することは、バイオ部会の教員にとっても大きな挑戦であった。授業が実施された第三段階の初期にはとまどいもたしかに見られた。しかし、授業後の検討会を重ねることによって、見られることがお互いの成長に寄与することだと理解されるようになり、そうしたとまどいは薄まっていった。

また、教員のほうでリバネスから学ぶことも多かった。リバネスは、メンバー間で授業案を試行してみて問題がないかどうかチェックすることを、授業前に3回も繰り返していた。このことは大いにバイオ部会の教員を刺激した。また、リバネスは得意のパワーポイントを用いた講義に加えて、教員がよく使う紙と黒板による説明も取り入れたり、子どもたちが作業する時間や話し合う時間を設けたりするなどの工夫を教員側から学んで増やしていった。こうした真摯な姿勢と適応力、そして子どもたちへの情熱は、バイオ部会の教員の眼を外に開く重要な契機になったと考えられる。学校外から学ぶ意義につい

て理解を深めたことは、今後の教員としてのキャリア開発に有益であると考えられる。

### 4. リバネスとの関係

上述のように効果の大きい研修であったが、そこに至るには長期の連携という活動が必要であった。長い期間を通じて、外部団体であるリバネスと学校の関係がより効果的なものへと変化していったのである。

連携活動の初め、すなわち第二段階の初期には、学校とリバネスの間にある種の壁のようなものがあったかもしれない。まず、授業で扱う内容が高度であるため、専門的な知識については「教えるリバネスと教わる学校」という構図が強調されがちである。また、子どもの活動を念頭に置いた授業案づくりでは、教員側が主導的になるのはとうぜんである。すると、お互いの専門性を尊重することが、「ここまではリバネス、ここからは学校」というような壁を生んでしまうことになる。

しかし、第三段階に入ると、この壁は変容していった。まず、リバネスのメンバーも授業することによって、同じ子どもたちを教える授業者として語り合えるようになったことが大きい。検討会で「あの子がこうしていた…」 「この子がこんなことを言ってくれた」という具体的な議論をすることで、リバネスもまた授業案づくりのパートナーとして認められるようになった。すると、協力関係が変わってくる。「こういうことをしたいんだけどできるかなあ」と教員側からリバネスに聞いたり、「実験をこんなふうにしてみたらどうでしょう」とリバネスが教員側に提案したりするようなことが、自然にできるようになってきていた。

つまり、プロジェクトを通して、相互に不可侵という壁を形成するタイプの専門性の尊重から、お互いに補完しあうパートナーと認め合うタイプの専門性の尊重へと、質的な変化が起きたのである。これが可能になったのは、外部団体のリバネスが継続的に授業をし、なおかつ授業後の検討会にも参加していったからである。

### 5. 教育学研究者の関与

最後に、このバイオプロジェクトにおいて教育学研究者である村瀬が果たした役割について検討したい。それは、主に3つの側面に分けられるだろう。

#### 1) 通訳：

学校の教員と自然科学研究者との連携は、ある種の異文化交流でもあった。用語一つとってみても、かたや「ティームティーチング」かたや「スクリーニング」というように、あたりまえのように使っている言葉が相手

に通じない。また、授業のどういうところをポイントにするのか、子どもたちのどこを見て判断するのかという教員ならではの視点はリバネスにとって初めて出会うものである一方、高度な科学の内容や理論は教員にとっては未知で難解な分野である。

こうしたずれに気がつかないまま議論を進めていると、おたがいに疑問符が増えていき、膠着したりすれ違ったりするようになる。こうしたずれを察知し、何が問題を難しくしているのか、そしてそれぞれの側はどのような論理で考えているのかを見通し、言葉を補い、適切に議論を組み立てなおすことが村瀬に求められていた。

## 2) 「第三者」:

ここでいう「第三者」とは、傍観者のことではない。どちらにも属さない立場の人間であることを表している。たとえば議論の中でわからないことがあったときに、こんなことを聞いたら失礼だろうか、恥ずかしいだろうかと思うことでも、「第三者」には聞くことができる。悩みや愚痴も含めて、聞き役になることは重要な役割であった。

## 3) サポーター:

バイオプロジェクトを通じて成長し続ける教員とリバネスのメンバー、それを支えることも役割の一つである。プロジェクトがどのように発展しているのか、授業はどのように子どもたちを育てているのか、授業後の検討会で折に触れ表現することでプロジェクトメンバーの動機付けを維持することも、こうしたプロジェクトに参加する研究者の仕事の一部である。

## 6. バイオプロジェクトの成果と課題

本稿の目的である校内研に注目してこのプロジェクトの成果を要約すると、つぎのように述べることができる。

「外部との連携による総合学習のカリキュラム開発が可能であることを示した」

そして、これが可能になるための要素もいくつか明らかになった。第一に継続的活動であること、第二に授業の前後の活動に外部人材が参加すること、第三に教育学研究者が適切に参加すること、などが挙げられるよう。これらの条件が、上の命題を実現するためには必要だと考えられる。

ところで、今後の課題もまたこれらの条件に関係している。それは、活動の人的・財政的コストという問題である。今回、リバネスのメンバーには授業に関わる直接の経費・人件費は支払われているが、担当しない授業の参観や授業後検討会についてはほぼ無償の仕事になっている。こうしたプロジェクトの一般化に向けて、これは

克服すべき問題である。また、校内においても、検討会や授業準備にひじょうに多くの時間を割く活動であるため、教員にも大きく負担があることはたしかである。もちろん、授業をつくり子どもたちが育つことを目にするよるこびはこれらの負担を軽減させるものではあるが、制度的にもこれをどのように支えられるか、さらなる検討が必要となるであろう。

なお、本稿ではバイオプロジェクトの校内研としての意義を中心に論じたが、子どもたちの学習については稿を改めて検討したい。

### 〔資料〕 教員へのアンケート

1. 1この研修の楽しさやおもしろさについてお聞かせください。
バイオという最先端技術を通して知ることのできる知識やそこから疑問、想像を広げていける楽しさを、子ども達と一緒に味わうことができた。また、そうした世界に触れた子ども達の輝いた表情を見ることができた。
最先端の科学技術、知識を学ばせるために（触れさせるため）、方法、手段、ねらい必要性を考えていくところ。しかも学校内だけでなく、外部組織と連携して。
未知の世界に入ること。新しい実験を体験できること
学校外の研究団体との共同研究、作業ということに集約されますが、その内にもいろいろな楽しさ、おもしろさがあります。・新しい知識、物の見方、考え方にふれられること・教育に情熱をかたむける学校外団体を知られたこと自体・子どもの新しい反応等を見れること、など。
・研究者の考え方や物の見方に直接ふれながら新しい知識を得ることができたこと。・新しい世界を子どもたちと共に学び、子どもたちの輝く目、生き生きとした表情等が見れること。
自分の知らない世界について、新しい知識が増えることの喜び。新たにどんどん知りたくなる探究心の揺さぶり等、自分自身の開拓。知らない世界をどのように子ども達に伝えるか、そして子ども達と学ぶこと、子ども達から学ぶこと…いろいろな刺激。科学者の目、考え方と接する、新鮮な空気。得るものが多く楽しいです。

1. 2この研修の難しいところ、苦勞されているところについてお聞かせください。
ある程度内容を理解できていないと活動案がたてられないところが大変だった。
最先端の科学技術、知識を学ばせるために（触れさせるため）、方法、手段、ねらい必要性を考えていくところ。しかも学校内だけでなく、外部組織と連携して。
未知の世界なので理解できないことがある

研修時間の確保・内容を、小学校レベルまでにかみくだく方法を考えること
・研修時間を確保すること・十分な話し合いができないと授業を組み立てることができない。その話し合いは授業の展開の仕方についてだけでなく知識を得る場でもあるので、通常の研修より長時間必要となる。・内容が難しいのでいかにかみくだいて子どもたちに伝えるか、その方法。
・時間的なこと…18回(90分)×2回をすべて見られないことから、話し合いに深まりが持てないかもしれないという不安。バイオの時間、参観したり授業をする時、自習体制になるので、限界があること。放課後、事務処理、子どもを残しての指導ができないこと。・技術面…難しい内容なので、理解し、伝えること(授業を組み立てること)

1. 3この研修を通して、教師として自分が変わったな、成長したと思うことはありますか。
外部の方々と連携することによって、従来とは違うスタイルの授業のあり方について考えることができ、他の教科、題材でも教師対児童の型だけでなく、その他の可能性について考えるようになった。
バイオ技術に触れ、多少なりともいのちについて考える機会を得た。
バイオに対する関心が高まった
・子どもの興味、関心のもたせ方及びもたせることの大切さを改めて感じたこと・子どもの能力が、教師の予想以上にあることに気づく大切さを発見したこと・本物にふれる、実際に見る、行うことが、効果的であるということを再確認した。
・子どもたちの興味、関心を大切に授業を展開する大切さを改めて感じたこと・子どもたちの力を新たに発見したこと・いろいろな方の授業が参観でき指導法について学べたとともに今まで以上に学級が授業がオープンになったこと。
・知識が増えたことにより、子ども達に話す話題が増え、気持ちの余裕が増えたような気がします。・教師というより、ヒトとして生命が生まれ育まれてきたことの神秘性を感じ、命あるもの、または地球という星に対する感性が変わったような気がします。

2. 1前任校までに、校内研修・授業研究の経験はありますか。もしあるときは、現在の研修とくらべて研修の方法・スタイルや頻度について相違点を教えてください。
研修の方法はほぼ同じ。頻度は授業回数によるが、ほぼかわらないと思う。
有効性を実感することがなかなか難しい。
短期間に集中していること

とにかく集中して行う大切さ、大変さは今回の研修の方がはるかに大きい。知識の習得よりも、子どもの興味、関心、意欲に重点を置いて取り組んでいること(私個人が)。
研修の方法等に大きな違いはないと思います。1つの単元(?)を外部講師も含め複数で授業展開していることが今までの研修との大きな違いかと思っています。ゲストティーチャーやT.T.の形はありましたが、毎回のように指導者が変わるのはありませんでした。
・毎年ありました。公開研究授業では、非公開より、お招きする講師の数が多かったです。また、本校は今年ピア・サポートと2本立てでしたが、大体1つの教科・領域で教師一丸となって取り組んでいました。その場合、低・中・高学年部会に分かれて話し合い、全体会を持ち、共通理解を図る、という形でした。

2. 2校内研修が有意義になるためには、どのような条件が必要とお考えですか。
研修に臨む者達の協力体制が整っていること、研修時間がきちんと確保されていること。
効果が、児童にも教師にも実感できること。
・必要感・やる気・時間の確保・個々の問題意識
・やらされている研修ではなく、自らやっている研修だという自覚・協力体制整備
・十分な時間が確保されること・校内の協力体制・研修に臨む前向きな姿勢
2. 1でも書きましたが、校内1本のテーマでいくことだと思います。全体の共通認識、バックアップ、学年での系統性も重要になってくると思います。それらの中で研修も深まりが出てきて、継続性を持つようになると思います。

2. 3校内研修に教育学研究者が参加することには、どのようなメリットやデメリットがあるとお考えでしょうか。
校内に限った研修では、人数が少なく考え方もかたよってしまうこともあるため、別の立場、新しい視点で意見を加えてもらえれば、研修内容もより発展するだろう。(メリット)
教師の「一生懸命さ」「がんばり」を取り除いての評価
・専門的な知識が得られること・日時の組み方が難しい
ある面にかたよりがちな内容に、新しい視点からのアドバイスがうけられたり、方向性を示されたりすることが一番のメリットです。特に理論的な裏づけをしていただくと大変ありがたいと感じます。デメリットはありません。
新しい視点、考え方をいただけることがメリットだと思います。指導の方法等に反省や新たな発見があり、よりよい指導の改善を図ることができると思います。また指導の自信へもつながるものと思います。

・新しい考え方、技術等、またその道の専門的な内容を教授することで、教員たちに新しい風が当たると思います。また、子ども達と触れる時間が持てるなら（今回のように）、子ども達にとっても、学校以外の先生の話が聞けたり、認められたり、ほめられたりすることは、大きな喜びや刺激になるのではないのでしょうか。

2. 4 校内研修を支えるために、校長や教育委員会はどのような役割りを担うことができるとお考えでしょうか。

研修内容が学校の中で必要なものであると理解した上で、研修時間や場所の設定、確保を求めたい。

予算の確保

予算の確保、条件整備

・教員ひとりひとりが意欲を持って研修に取り組める体制づくり及び内容の許容・資金面での援助

・さまざまな研修の機会を与えてくださること・研修時間の確保・予算面でのバックアップ

教員たちの話し合いや意欲が活かされるように支援してほしい。具体的には、時々話し合いの場に顔を出したり、全体会で校内の交流を持ち、良い面、反省される面について意見を言う。教育委員会は、研修に必要な予算（文房具、書籍、講師を招くお金（人件費？）その他必要経費）の提供、学校を支える温かい見守りがあれば、いいかな、と思います。

（追記：本稿は2004年校内研修事例検討会で報告され、2005年にまとめられたものである。）